

北支

老河口戦記

秋田県 佐藤彦四郎

昭和十九年十月、河南作戦も完了し、秋めいた中国の空に米軍機の往来が激しくなり、ここ河南省確山の青空にも毎日のごとく飛んで行く。遙か一万メートルの上空をB 29爆撃機が飛行雲を引きながら行く姿を見て切齒扼腕したものである。

おそらく重慶基地を飛び立ち老河口を中継基地として日本本土爆撃に向かったものと思います。友軍機は全然見えない。

当時、大陸在百万の陸軍は重慶攻略に決意を秘め

て、作戦行動の準備に懸命の努力をしていたのである。

このような状況の下に支那派遣軍は、北支那方面軍に対し老河口攻略を下命した。北支那方面軍は第十二軍に作戦の実施を命じ、第十二軍は二十年三月十一日より老河口を攻略すべく挺進作戦を計画した。我が独立歩兵第二十八大隊は十二軍隷下の第百十五師団第八十五旅団の挺進部隊として行動したのである。

時あたかも春雨煙る三月二十日、確山を出発、米軍機の昼の来襲を避けて夜の行軍で老河口に向け出発した。雨は止まず、道は遠く、装具は濡れ、ますます重く、休憩も出来ないままドロドロのぬかるみを歩き続けた。

この時の歩兵一人の装備の重量は、携帯口糧（一週間分）を含め約三十キロあった。三月二十一日午前二

時、牛蹄付近の小部落和庄で大休止、朝食、昼食の準備、寝る暇も無く兵器被服の手入れを行い、次の出発準備に忙殺される。戦争とは非情なものとはいいなからとても言葉に表わし得ない苦衷があるものだ。

夜になって行軍開始、二十二日早朝、舞陽南方二十キロ尚店から攻勢前進を行い、敵第五十五軍の一線を突破した。道路はさらに悪く、行動は困難で、その後幾つかの重畳の山々を越え、若干の抵抗を排除しつつ南陽へと向かった。

二十三日、南陽南方白河を渡河し、昼前、小休止した途端、米軍機四機が銃撃と小型爆弾で作戦開始以来初の空撃をしてきた。予定地区への進出は急を要するため明るい間は道路の両側を分進した。師団は順調に作戦を進め、主力は南陽方面に行動、二十八大隊は老河口へ向け前進した。途中鄧県付近で敵十二軍二十二師と対戦、二十七日早朝これを排除したが、敵機二機が頭上をかすめ県城方面へ飛行した。間もなく大音響が聞こえたが、これは敵機による誤爆であった。

二十八日早朝、鄧県南西八キロの陶営付近に進出、

二十九日朝、季官橋で攻撃準備する。この間敵機の妨害を避けての連続の夜行軍で、将兵の疲労は大きかった。いよいよ老河口近くに迫り、士気は誠に旺盛であった。三十一日未明、老河口東方六キロ付近の台の上に進出、稜線から赤い炎と無数に点滅する射弾の閃光の中の街こそ老河口で、作戦開始以来十日余りであろうやく目標の地点に到着した。

これより先、騎砲兵第四連隊、騎兵第二十五連隊、騎兵第二十六連隊がその機動力を発揮し、行動したる第二十五連隊が二十七日老河口北門に突入した。さらに本城突入を企図して数回に亘り反復攻撃を敢行したが、敵の執拗な反撃によって損害続出、遂に不成功に終わった。

一方、二十六連隊は馬屈山を攻撃した。敵の集中砲火と敵機の攻撃を受けながらも完全にこれを占領、十八時飛行場を確保した。しかし本城の攻撃は厳しく、三十一日払暁を期して独立歩兵第三十大隊と共に北門より総攻撃を決行したが敵の激烈な反撃に会い、中隊長相次いで戦死し、死傷続出、遂に頓挫するに至った。

我々の師団および大隊は、この未明に台上に進出した。騎兵連隊は残弾も底をつき、暗号書の焼却を命じ、軍旗を奉じて辛うじて夜陰を利し、また第二十六連隊は四月一日朝、第二十五連隊は第二十六連隊の協力を得て戦場を離脱、共に「手馬」位置へ集結したのは四月二日の朝である。師団長は騎兵旅団長に後方に退がって戦力を回復するよう要望した。

師団は四月一日攻撃計画を策定し、歩兵第八十五旅団を基幹として老河口を攻撃すべく二十六、二十七、二十八、二十九各大隊に下命した。各隊は四月二日までに騎兵旅団と交替を完了した。総攻撃は四月七日払暁と下達された。この間夜陰に乗り城壁三百メートル手前まで接近、偵察陣地も構築した。各隊共、同様で部隊の各種火炮も至近距離に巧みに擬装して攻撃に備えた。

四月六日いよいよ明日は総攻撃だ、午後は休養して身辺の準備をした。ほとんどの兵が汚れの無い襦袢、袴下と着替えた。ある兵は髭を剃り、写真や手紙を始末して未練を断った。作戦に初参加の補充兵の中には

千人針の腹巻を締め直す者もいた。雑糞に焼餅、水筒にお湯を満し、兵器の手入れに余念ない者などの諸準備状況は刻々迫る戦いの時間に対する心構えの切なさをみせていた。そして死体の収容もままならず退った騎兵の復讐の意も込めて、乾坤一擲の総攻撃はいよいよ迫り、陽も落ちた。

背囊や馬匹その他、中隊の諸携行品等の残置監視兵を残して、夕暮れの中静かに集合整列する。その夜は暗く、連絡網をたよりに昨夜まで掘った攻撃前進位置の壕へと進んだ。各小隊、各分隊、各兵は息を殺して位置に就いた。敵前二百メートル伏せたまま音を殺して円匙で静かにしかし懸命に掘った蛸壺は深くなくなった。やがて攻撃準備も万全となった。部隊長以下嵐の前の静けさの中、滴を持って攻撃前進の合図を待つのみだ。

星が一つ二つ消えて、朝が明け染めてきた。鉄帽の紐を締め直して敵陣を睨んで固睡をのんだ。午前六時野重の一弾が後方山麓より頭上をうなずいて敵陣に炸裂した。間髪を入れず全砲門が射撃を開始して老河口は

正に震駭した。数分にして敵陣は硝煙ももうと立ちこめている。一分、準備射撃終わりの時間が迫る。敵城壁には第二十六大隊、正面には第二十八大隊が配置したが、野重弾による城壁の破壊口がいつこうに開かず、前進命令を今か今かと待つ身に不安と焦燥がつつてきた。

砲撃開始と同時に戦車は一斉に穴から出て前進を開始した。忽ち全軍に攻撃、前進の命令が下った。ひとしきり砲兵の支援射撃が城壁陣地の前後に落下する。その中で全線一斉に大地を蹴る。そのうち支援射撃の弾丸が尽きたか尻つぼみになった。敵陣から猛射が始まり、爆薬を背負った工兵が右に走った。野重の至近弾が敵陣よりずっと手前に時々炸裂する。戦車は轟々と銃眼の目つぶし射撃をしながら前進し城壁に迫る。歩兵は、一躍進、二躍進、敵前百メートル南北に走る道路を越えた直後、一分隊軽機の佐藤（甫）がひっくり返った。内山分隊長が軽機を取って右に走ったトタン、続いて倒れた。咄嗟に後に続く。「衛生兵前へ」に衛生兵「袴田」が走って来たが佐藤は即死した。

戦車が電柱を倒し電線を引きつづて行く。疾走してきた軍犬が目前で斃れる。匍匐で行く工兵の姿がチラ見えたが全員戦死か。遂に工兵による城壁爆破も不成功に終わる。あと一躍進で突撃距離だが、全線敵の見えるなかである。友軍の砲撃は止んで、敵からの砲弾ばかりとなった。小東門前に戦車が集まった。我々は突撃のためこれに追隨した。忽ち戦車に敵砲弾が集中したので戦車は慌てて疎開したが、敵砲弾は止まない。たまらないのは歩兵で、銃眼の敵の猛射が激しくなってくる。野重の弾痕にへばりついて辛うじて身をかくした。各隊とも連絡が不十分で適切な方法もなく、遂に戦況膠着する。

敵火に曝されながら老河口城外は正に修羅場と化した。緊張の連続のうちに時間は過ぎて、城壁陣地に斜陽の影が出てきた。我々は夜襲決行以外にないと覚悟をきめた。陽は敵陣の背後に落ちて次第に黒ずんできた。城外を血に染めた幾多戦友の屍を横たえながら夜に入った。焼餅を少しづつ嚙り腹を満たす。敵は夜襲を怖れてガンリンを焚いた照明で城壁陣地を昼のよう

に明るくした。敵指揮官が音頭をとって日本語で罵声を浴びせる。これに唱和して叫び声上がる。こちらも絶叫したいが声を殺して黙々と穴を深めた。叫び声は高く低く一晩中どよめき続けた。

八日、薄暮攻撃、さらに夜襲は全線にわたり繰り返された。部隊本部作業隊が繩梯子を利用して突入したが、敵手榴弾に中原少尉以下全滅。同年兵で同郷の工藤長五郎も戦死した。敵はますます陣地と兵を補強し、攻撃は次第に困難を増すなか、夜は早くも明けてきた。たまたま敵機数機が見えた瞬間、旋回もせず真つ直ぐ第二十六大隊付近に白い小さな落下傘爆弾を数発炸裂させる。数輦の戦車が慌てて動いたが敵機は去った。小隊は道路の橋の所に集まり「佐藤」「内山」の死体をこっそり引き寄せ、僅かな土をかぶせ黙禱する間もなく敵銃弾より身をかくす。

正午過ぎ第二十六大隊の正面城壁に数発の巨弾が命中し、城壁が崩れた。間髪を入れず一輦の戦車が登った。第一線の蝟壺に入っていた兵がつづいて突入。中隊長以下数人が散ったものの突破口の一角を占領し

た。敵は全線にわたり城壁下に一齐に手榴弾を投擲、爆煙と土煙が城壁を蔽って熾烈を極めている中、城壁上には一軍曹の打ち振る「日の丸」が目につき、虎視眈々、窺っていた全線に喚声が起こって、潮のごとく突撃を決行、城内に突入した。時に十三時二十分、昨朝来の戦いに倒れた戦友に見せたい思いで感激の涙が流れた。

どの顔も汚れ、幾すじの涙を流し思いきり突っ走り破壊口に突進した。城壁下で衛生兵が、戦死した中隊長の鼻の形を整え、両手を胸に組ませていた。すでに国旗で顔を蔽った幾つかの死体もあった。目礼しながら破壊口を敵砲撃を予想しつつよじ登った。

今度は一挙に市街に向けて突入すべく城壁陣地に踏み込んだ途端、びっくりした。正に累々たる死体である。焼けているもの、膝が逆に折れているもの、敵も犠牲を顧みず、すでに二十七日の騎兵の攻撃以来十日に及ぶ死守である。速射砲が機関砲が重機がグンニャリ曲がつて転がっている。パケツの白い飯が目についた。何日振りかに見える米の飯だ。でも腹の虫を抑え遅

れじと市街に突入する。すでに先陣の戦車が進んでいる。北門から直進する道路の十字路はすべてトーチカとなっていた。市街の軒下や壁穴から手榴弾と銃を腰だめで前進する。

小東門近くに高い教会の鐘塔があった、そこには足をつながれた敵兵の死体があり、必至の抵抗のために兵を督戦した厳しさを見た。点在する友軍砲兵の弾痕と無惨な破壊には、何か溜飲の下がる気さえした。結局敵は老河口西側の城壁のない漢水の渡渉可能な地点より潰走し、一部は南門付近より脱出南下した。二十九大隊は潰走する敵に猛射を浴びせたが、弾薬乏しく、野重は残弾僅かに二発となり手をこまねいて眺めるしかなかった。夕方までに掃蕩を終え、これで完全に占領したのである。

師団の昨夜来の戦死者百一人、負傷者は二百八十三人に達し、さらに騎兵部隊の損害を含めば誠に損害は甚大といへば、敵制空権下、長駆挺進し、乏しい食糧と限られた弾薬で如何に肉弾力攻めたか。地の利を得た重装備の数多くの敵が、如何に執拗に抵抗したか

の証拠であろう。

部隊命令に基づき警戒配備の後、久方振りに立派な家屋に陣取り、後方に残した背囊や馬を取り寄せ、やと探してきた食糧にありついた。疲れた身体を横たえ、ようやく眠りにつこうとした矢先、凄惨な音がした。対岸からの砲撃が始まり、火柱を上げて市街に落ち出した。占領したとはいえ戦友の屍はなお城外にある今夜はこの町に静かに身を托して、明日への回復を念願したのも全く束の間である。

まもなく命令が出て、明早朝までに攻撃前の露営地に各隊分散撤退せよとのことである。それでもグッスリ眠り込んだ兵もいた。午前四時、撤退準備にかかる。敵砲弾は小止みなくしきりと所構わず落下して、異様な炸裂音は遠く近く不気味に続いた。その最中敵の残した米、味噌、干柿の砂糖漬を馬に山と積んでの引越しである。撤退の途次、城外に眠る戦友のポケットから遺留品を探し、閔節から腕一本を帯剣で切取り、白布に巻いて持ち帰った。

翌早朝から対岸の敵砲兵と米機により老河口の市街

は徹底的に破壊され、砲爆の轟音と天に沖する黒煙の中に次第に廢墟となった。

撤収した我々は戰場掃除を終え、敵機の飛来する下で戦死者の腕等火葬に付し、遺骨を茶碗に納めて以後戦友を胸に抱きながら作戦を続けた。一中隊は四月十一日露营地を出発、十五日雲台山に進駐、警備していた第二十七大隊と交代した。以来毎日の如く陣地構築に専念した。対空、対砲火のための壕掘りである。山の中腹を掘削、その上に土を盛った。

四月二十九日天長節の日、歩、砲、飛、三位一体の敵による総反攻に会う。敵二個軍（四個師）敵機十八機を迎え討つ第一中隊は斎藤中隊長以下百五十人、死闘は早朝から数時間におよび、昼過ぎ我が主力軍の進出により攻撃を断念したようだ。その後、陣地に補修を加え、強固な陣地にした。

六月半ば浙川へ転進を命ぜられた。さらば恨み多き老河口よ、誰の胸にも、感慨深く暮れゆく老河口を見つめながら、静かに雲台の山を降りた。

衣師団の軍馬について

島根県 黒崎 敏夫

軍 歴

昭和十八年十月（濟南）

北支派遣軍第三十九師団（藤）病馬廠

昭和十九年十月（泰安） 独立歩兵第四十五大隊（衣）

昭和二十年三月（濟南） 第五十九師団（衣）獣医部

昭和二十年六月 陸軍獣医大尉

そ の 一

戦況も南方に拡大し、昭和十九年には関東軍の部隊が、ビルマ、比島等に移動を開始していく。

第五十九師団（衣師団）は北支、山東省、濟南を中心に駐屯していた。師団獣医部は、この南進部隊に馬糧、獣医資材の補給を担当したが、乾草（あわ藁）の集荷に大変苦労した。

濟南周辺も都市部を除き、八路軍の進攻が激しくな